

DSM-5 を使う人のパートナーになる 1 冊

書評者: 村井 俊哉 (京大教授・精神医学)

米国精神医学会が出版する『精神疾患の診断・統計マニュアル』(通称 DSM) の改訂第 5 版 (DSM-5) が、2013 年に出版された。そして、その日本語訳は日本精神神経学会の用語監修のもと、2014 年に出版された。WHO による疾病分類である ICD の改訂も、DSM-5 と歩調を合わせていくことが予想されているから、これからの日本の、そして世界各国の精神科の臨床・研究・教育は、DSM-5 に準拠したかたちで行われていくと考えて間違いないだろう。

日本の精神科医は、それぞれの現場で、DSM-5 の使用を開始しているだろうけれども、DSM-5 の書籍それ自体は、単独では使いこなすのが難しい。今回紹介する『DSM-5 を使いこなすための臨床精神医学テキスト』は、原題が“Introductory Textbook of Psychiatry 6th edition”となっているように、精神医学の初学者を対象とした教科書である。ただ、DSM の改訂を契機として、DSM-5 に完全に準拠するかたちで、第 6 版は全面的に改訂された。結果として、精神科医としてのキャリアは十分であるが DSM-5 は使い始めたばかりのほとんどの精神科医 (例えば私) にとっても、重宝する内容となっている。

本書は 3 部構成になっているが、第 1 部 (第 1~3 章) は、単独でも読み応え十分である。DSM-5 の無味乾燥な診断基準の羅列をみて、精神医学に対して幻滅しかかっている初学者がいたとしたら、是非第 1 章を一読され、診断基準の使用法と共に、こうした診断基準作成の背後にある思想に触れられることをお勧めしたい。一方で、DSM が日本に導入される前に精神医学教育を受けたベテランの精神科医には、第 2 章が興味深いかもしれない。精神科面接の心得の基本的なところは、DSM 時代の米国であっても、昔の日本とさほど変わらないことに気付かれるだろう。

第 2 部 (第 4~17 章) の疾患別解説は、DSM-5 への準拠が徹底された、本書の目玉である。エビデンスに基づく体系的な解説と、具体的な症例記載のバランスがよい。馴染みの疾患については DSM-5 での診断基準の変更点に着目しながら知識を再度整理できるし、経験の少ない疾患についても疾患概念の概略を掴んでおく上で本書の利用価値は高い。

治療論を中心とした第 3 部 (第 18~21 章) は、初学者にとってはもちろん必須の学習事項だろうけれども、ベテランの精神科医にとっても利用価値は高い。例えば司法精神医学を

扱った第 19 章など，日米の社会状況やシステムの違いを比較しながら読んでみるのもよいかもしれない。

翻訳は，こなれていて非常に読みやすい。こうした書物は出版のスピード感も重要である。短期間で，クオリティの高い翻訳を日本の読者に届けていただいた監訳者・訳者のお二人の先生方に感謝したい。